

# 郷土資料館だより

Vol.41 No.2

2018.12.1

明治150年富士・沼津・三島3市博物館共同企画展 幕末明治の富士・沼津・三島  
「近代三島をつくった人々」(後期 経済・文化編) 開催中

●開催期間平成30年10月13日(土)～平成31年1月3日(木)

前期 政治・教育編が終了し、後期 経済・文化編が始まりました。明治期に興った製糸・酪農等といった新しい産業や、官営・民営鉄道の敷設、政治・経済の担い手たちの俳諧を通じた文化的交流などを紹介しています。

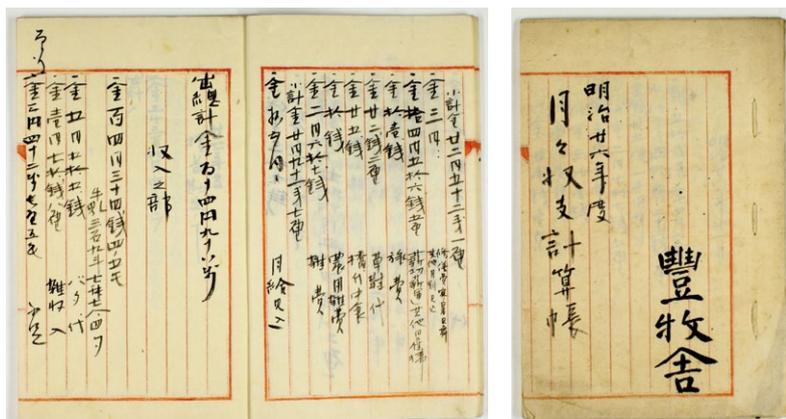
## ●北伊豆に酪農を広めた花島兵右衛門

三島の近代化に貢献した人物としてまず挙げられるのが、花島兵右衛門です。久保町(現三島市中央町)で酒造業を営んでいた兵右衛門は、牧場経営、キリスト教精神に基づく女子教育を目指した<sup>しょうか</sup>薔花女学校創設、鉄道敷設、練乳工場の設立などこの地域の発展に尽力した人物です。彼の幅広い功績の中から、今回は牧場経営とその関連資料をご紹介します。

兵右衛門は、明治10年代初頭に病後療養中、栄養豊富な牛乳のよさを知り、その普及を思い立ちます。当時の三島では牛乳を入手することが困難であったことから、彼は明治18年に豊牧舎(豊牧社とも)という牧場を設立しました。牧場は三嶋大社より東寄り、東海道に面した南側(現在の日の出町付近)に設け、牛8頭を飼育して牛乳販売を始めました。当時の北伊豆では牧畜の普及を目指す気運が高まっており、明治14年にはすでに丹那村(現函南町)に伊豆産馬会社、修善寺に桂谷牧場が設立されていました。

牧場経営については、明治26～27年にかけての牧場の収支が記録された資料が残っています。これによれば豊牧舎では牛・馬を飼育し、牛乳やバターを販売するほか繁殖のための交尾料などで収入を得ていました。当時の牛乳販売は配達が一般的で、豊牧舎でも経費に「配達橋代中食草鞋代」が計上されており、近隣の顧客宅へ配達していたことがわかります。鶴喰<sup>つるはみ</sup>広田遺跡からは、豊牧舎の牛乳ビンが出土しています。

当時の三島ではおそらく唯一の牛乳販売店、ライバルはなく、さぞかし儲かったのではないかと考えたいところですが、なかなかそうはいかなかったようです。支出と収入の詳しい内訳が掲載されている明治26年1月、2月の明細によれば、支出には家畜の飼料代・配達にかかる費用・雇人の給料などが計上され、収入として牛乳(両月とも700ℓ以上販売)やバターの売上・繁殖のための交尾料が記録されています。収支は1月は約1.5円の黒字、2月はなんと3円以上の赤字です。明治30年の東京の小学校教員の初任給が約8円(『値段史年表 明治・大正・昭和』朝日新聞社、昭和63年)ですから、事業としては少々苦しかったのではないかと推測できます。当時はまだ牛乳を飲む習慣がさほど一般的でなかったことや、冷蔵庫のない時代では保存がきかない点もネックになったことでしょう。



「豊牧舎月々収支計算書」

右：表紙

左：明治26年2月の明細

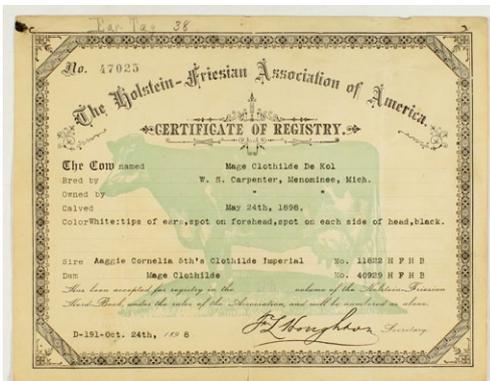
牛乳を3石9斗7升7合4勺販売し、104円34銭4厘五毛の売上を得ています。1合あたり約2.6銭です。これは当時の東京における米1合の値段の倍以上！高級品だったことがわかります。

牧場経営が難しいことは豊牧舎に限ったことではなく、当時の北伊豆周辺では共通の認識だったようです。豊牧舎より先に設立された伊豆産馬会社、桂谷牧場ともに、明治20年代中に廃業しています。明治2年、北伊豆でいち早く牧畜を始めた仁田大八郎（常種。現函南町仁田出身。伊豆産馬会社を設立した仁田大八郎小三郎の父）が明治21年に兵右衛門に送った書状には、牧畜業は気候風土や経済的な面で成功が難しく、家畜を殖やすには農家での家畜飼育を奨励するのがよい、と述べられています。

牧場経営の難しさが浮き彫りとなってくる中、兵右衛門は明治23年頃より余った牛乳を活用する方法として練乳製造を試みます。明治24年頃より販売を開始し、内国勸業博覧会（新しい物産などの品評会。大人気イベントで大勢の人でにぎわった）へも出品しました。明治28年に開催された第4回内国勸業博覧会では、兵右衛門の練乳は農業森林及び園芸部門（生糸、畜産加工品など、農業製品やその加工品が幅広くエントリーする部門）で「有功二等」を受賞しました。これは同部門に出品した中で上位1%以内に入る好成绩です。

手ごたえを感じたであろう兵右衛門は、練乳製造の規模を拡大させます。受賞の翌年には花島煉乳場を設立し（設立年代を明治24年とする文献もある）、練乳を「金鷄<sup>きんし</sup>ミルク」というブランド名で販売しました。またこの頃、大量の練乳を一度に安定して製造できる真空釜をアメリカから輸入し、日本で初めてこの釜を用いた製法に成功しています。当時練乳といえば主に輸入品で、国産は流通量も少なく、質の面でも輸入品に劣るとされていました。しかし金鷄ミルクは「天晴の勇者とも認むべきは金鷄印であろう。金鷄印は国内産の優良品にして信用すべきものである」（鈴木敬策『家庭における牛乳とその製品』明治41年）と評され、広く全国に販売されたほか、軍隊にも納入されました。

練乳製造の規模を拡大した後の明治31年、兵右衛門は豊牧舎を譲渡し、牧場経営からは手を引きました。しかし練乳の原料となる生乳を、近隣から安定して大量に調達する必要はあります。兵右衛門は近隣農家による副業としての乳牛飼育を奨励したほか、養嗣子・轍吉（仁田大八郎常種の五男）をアメリカへ派遣し、乳量豊富なホルスタイン種の牛を輸入しました。



#### アメリカ・ホルスタイン・フリージアン協会による牛の登録証明書

明治29年に渡米した轍吉は、20頭（25頭説もあり）のホルスタインを日本に輸入し、北海道や周辺の酪農家に一部を譲渡したほか、三島種牛場で繁殖用に飼育しました。輸入された牛のうち一部は名前が判明し、各地で良質な乳牛の繁殖に貢献しています。資料は1898年（明治31年）に生まれたメイジ・クロシルド・デ・コール号の登録証明書で、三島種牛場の関係書類とともに保存されていたことから、おそらく轍吉が輸入した牛のうちの1頭と考えられます。

兵右衛門は、アメリカから輸入した優れたホルスタイン種の牛を繁殖させるため、三島種牛場を設立しました。この牧場からは多くの優れた牛が産出され、農家は乳牛を飼育することで得た生乳を花島煉乳場へ販売し、現金収入を得ました。こうして周辺農家による乳牛飼育がこの地域で普及し、原料乳を安定的に確保した花島煉乳場の練乳生産量は、大正5年時点で全国2位になりました。これは1位の房総煉乳株式会社とは僅差、一方3位の北海道煉乳株式会社とは2倍近い差をつけてのものです。バターの生産量においても、トラピスト修道院に次いで2位の生産量を誇りました。

一大酪農地帯となった田方郡周辺には、大正時代以降、花島煉乳場のほかにも田京煉乳製造所、日本煉乳株式会社（のちに森永煉乳三島工場）など乳製品の工場が設立されていきました。牛8頭で始まった花島兵右衛門の酪農事業は、農家を潤し、地域経済に大きく貢献する乳製品工業へと発展を遂げたのです。

花島煉乳場は、大正6年（1917）に北海道札幌練乳場と合併して極東煉乳株式会社となり、才塚（現在の三島市南二日町。市営南二日町住宅付近）に移転しました。以降合併等を経て、兵右衛門の興した事業は現在の森永乳業株式会社に引き継がれていきます。

## ●鉄道を熱望する三島の人々（三島駅設置と<sup>すそう</sup>豆相鉄道の開業）

明治22年、東京～神戸間で東海道線が全通した際、箱根山を迂回するルート（現御殿場線）がとられ、しかも三島付近には駅が設置されませんでした。そのため、三島を通る旅客が減り、宿場町であった三島の経済は大打撃を受けたといわれています。

そこで三島町議会は三島停車場設置請願委員6名を選出し、鉄道局へ三島駅設置の働きかけを行いました。この委員6名は以下のとおりです。

三浦丈八郎、河辺宰兵衛、島田保作、栗原宇兵衛、花島兵右衛門、間宮清左衛門

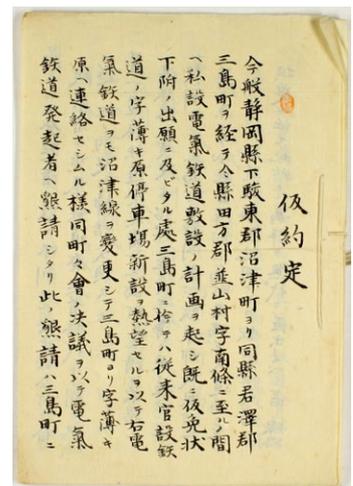
このうち三浦丈八郎・河辺宰兵衛・間宮清左衛門は明治から大正にかけて町長に就任しており、花島兵右衛門は三島の産業（牧畜・乳加工業など）・金融の発展に大きな力を発揮した人物でのちの豆相鉄道や駿豆電気鉄道の経営にも関わっています。栗原宇兵衛も江戸時代に三島宿の名主をつとめたことのある家柄の出身です。このように当時の三島町にあっては最有力者を集めたといっても過言ではない布陣で駅の誘致に臨んでおり、町及び町民の意気込みの強さがうかがえます。

しかし、鉄道局との交渉は難航しました。折しも東京で小山田信蔵らによって設立された豆相鉄道株式会社が沼津から三島を経由して伊豆方面に至る鉄道の新設を計画していました。請願委員は小山田氏らに接触、鉄道の起点を沼津から東海道線三島駅設置を想定している長泉村下土狩<sup>しもとがり</sup>に切り替えるよう交渉し、明治28年1月、これに成功します。この豆相鉄道開業の決定が契機となって東海道線の三島駅（現下土狩駅）設置も決まり、両者は明治31年に開業しました。

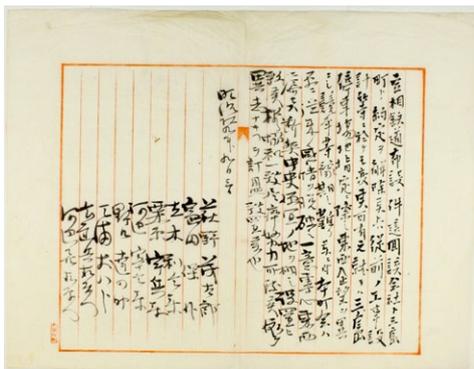
### ■仮約定 明治27年（1894）、市指定文化財 花島家文書

三島町長三浦丈八郎と豆相鉄道発起人との間で明治28年にかわされた契約書の下書きと思われるもの。“起点を沼津から下土狩に変更すれば線路用の敷地1万坪を無償で提供すること”を骨子とする4か条からなる。内容は以下のとおり。

- (1) 路線を変更した場合、下土狩から三島町南端までの線路用敷地1万坪を三島町が無償提供する。もし、線路の敷地が1万坪未満だった場合、その余りは三島駅用の敷地として無償提供すること。
- (2) 鉄道会社は50円の株式20枚(1000円分)を三島町へ提供すること。
- (3) 三島町は鉄道会社の土地購入その他全般のことについて、会社のために仲介などの尽力をすること。
- (4) この約定は鉄道の方式が電気鉄道から軽便鉄道に変更されても有効とすること。



三島町と豆相鉄道との間の契約内容を見ていくと、線路の敷地が1万坪未満だった場合には駅の敷地としてその余りを提供するとしていたり、具体的な項目のない全般的なことについて尽力を要求されたり、かなり一方的な内容となっています。ここに、どうしても三島駅を設置したいという三島町民の悲しいまでの熱意がみてとれます。また、豆相鉄道は軽便鉄道として開業しますが、当初は電気鉄道として計画されていたことがわかります。



### ■三島町停車場について 明治29年（1896）9月3日、市指定文化財 花島家文書

豆相鉄道布設の件、<sup>このたび</sup>今回該会社と三島町との<sup>そろう</sup>約定を解除候上は、従前の工事設計等に於ても<sup>これあるべく</sup>変更可有之、就ては三島停車場地指定に際し、東西企望を異にし競争等予期し難く候に付、本町会は更に従来の感情を脱破し、一意専心、東西に偏せず、断然中央便宜の地を<sup>いたされ</sup>□し、設置被致候様、協和一致、<sup>じんすい</sup>尽瘁努力可<sup>いたすべく</sup>致候、依て異志なき事を訂盟致置候也

明治廿九年九月三日

萩野 茂太郎、島田 保作、立木 利兵衛、栗原 宇兵衛、河辺 幸兵衛、野口 達の助、  
三浦 丈八郎、花島 兵右衛門、河辺 喜左衛門

三島駅と豆相鉄道の開業に喜び沸き立った三島町民でしたが、三島町中心部に設置する駅の場所をめぐるには東西2派に分かれて激しく対立します。西部町民は広小路か旧御殿地（現南田町）を、東部町民は間眠神社付近（現東本町）か現北田町東部を希望し、ここに町当局や会社自体の要望が絡み、事態は複雑になり、解決の糸口は見えず、一時は路線を沼津駅発の当初の状態に戻さざるを得ない状況になってしまいました。

ここに至って中立を保つ町中央部出身の町議らが仲介の労を取り、三島町駅（現三島田町駅）の設置場所が現在地に決定し、無事開業へと向かっていったとされています。『三島市誌』には町中央部出身の草茅仁三郎・河辺富助・村上传右衛門・藤池浅次郎・河島新兵衛らが明治29年9月3日に三嶋大社近くの料亭、魚半亭に集まって第三者的な運動を行うことを決めた、とあります。

上で示した資料にも同日付で同じような内容が記されていますが、署名者が異なります。9名のうち5名が三島停車場設置請願委員であるため、町当局に近い立場をとっていた可能性もあり、さらに、「中央便宜の地」を設置場所とすることに「尽瘁努力」する、というかなり具体的な方針を打ち出していることから（魚半亭では運動の開始のみが決まっている）、魚半亭メンバーとは別グループとも考えられます。彼らは三島町きっての有力者で、何年にもわたって鉄道関連の問題に従事し、さらに、一つの地域に偏らないメンバー構成（9名の中には西部出身者も含まれている）でした。このようなメンバーによる運動が問題解決に重要な役割を果たした可能性は高いのではないのでしょうか。

### ●豆相鉄道の経営に参画した地元出身者

豆相鉄道は東京の小山田信蔵社長（もとは水戸出身）らによって発起された、伊豆地域外からやってきた会社で、地元出身で経営に参画していたものについては花島兵右衛門以外はっきりとはわかっていません。

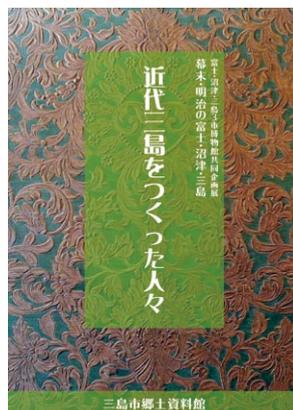
今回の展示資料の中に田京駅設置を目指した田京地区の有力者と豆相鉄道との間に交わされた契約書（明治32年）があります。内容は駅設置のために資金や土地の提供を地元住民が約束しているものですが、今回は資料の内容ではなく、受取人に注目します。受取人は豆相鉄道の代表として4名の名がありますが、その中に花島兵右衛門と箕田寿平が含まれています。箕田寿平は豆相鉄道の敷設を支援した、とされていますが、この資料から開業後の経営にも参画していたことがわかります。

## 企画展図録刊行のご案内

『近代三島をつくった人々』 販売価格 1,000 円（A4 版 128 頁）

企画展「近代三島をつくった人々」の展示解説図録を刊行しました。江戸時代に宿場町として栄えた三島が、どのような形で近代化を遂げていったのかを知ることでできる一冊です。

[内容] 1章 幕末・維新 / 2章 地方制度の整備 / 3章 新しい学校 / 4章 国民皆兵の時代 / 5章 明治の産業 / 6章 交通の発達 / 7章 文化 / 参考：主要人物紹介、年表



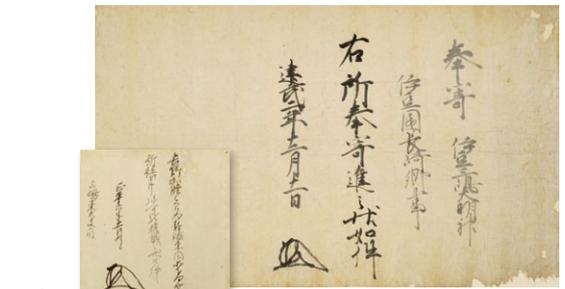
## 三嶋大社の古文書を読み解く / 5

## ◆足利尊氏の古文書④ 小さな紙に書かれた古文書

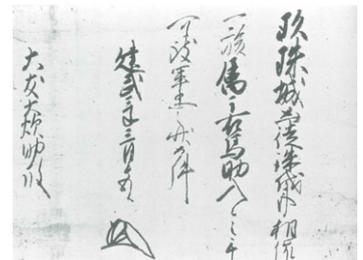
写真Ⅰは、前号(121号)で紹介した文書、正平6年(1351)尊氏御教書と、第3回で紹介した建武2年(1335)尊氏寄進状です。随分大きさが違いますね。古文書料紙は漉きあげた和紙を切り分けず使う場合が普通で、その状態の文書を縦紙と呼びます。もちろん切って使う場合もあり、例えば横長に2分の1に切ったものは切紙といえます。南北朝時代には、切紙をさらに半分以下にした小切紙という文書が多数みられますが、正平6年の文書がそうです。この文書の場合、6分の1程度まで刻んでいますが、よく見られる小切紙の寸法です。細かく折り畳み極秘な通信に使用したり、戦に臨む陣中から大量に発するため小さく刻む必要があったのではと考えられています。足利尊氏が鎌倉幕府に叛して以降、軍事行動に伴い盛んに発されていて、動乱の時代を象徴する古文書といえます。

ところでこの正平6年の小切紙文書は、最新の史料集『南北朝遺文』(関東編第3巻、2009年刊)では「写」とされています。少し前に編まれた『静岡県史』(資料編6、1992年刊)でも「写」としています。尊氏文書の写真を可能な限り掲載した小松茂美著『足利尊氏文書の研究』(1997年刊)では、大社所蔵の尊氏文書のうち、縦紙のものは全て採られましたが、2通遺る小切紙の尊氏文書は写真採録されませんでした。やはり「写」とみたのでしょうか。果たしてこの、花押まで書かれた小切紙は本当に写しなののでしょうか。正平6年の尊氏文書を今一度検討しておきましょう。

紙面の特徴として、建武2年寄進状と同じく、2行目が花押を避けるように右に曲がります。寄進状と同様、花押を書いた料紙に後から本文を記したことを示します。花押も、他の尊氏文書と比較して問題はみられません。料紙はどうでしょう。大社に遺る尊氏の縦紙の文書は楮紙(楮を材とする最も一般的な紙)ですが、この小切紙は斐紙(雁皮紙)です。斐紙は楮紙より滑りが良く薄い紙。小さな文字を書き込むにも、小さく折り畳むにも適した紙で、小切紙の多くに斐紙が使われています。ですから紙質に問題はありません。また細く畳んだと覚しき折り跡が残っています。文字はどうでしょう。斐紙なので墨の伸びが良く、力強さは感じないかも知れません。楮紙に残る文字と比べると少し違和感もあります。ですが縦紙の文書と同程度まで拡大し比較すると、筆勢はさほど劣っていないことがわかります(写真Ⅲを参照)。写しや偽文書の根拠に筆勢の弱さを気にすることがありますが、これも問題ない



写真Ⅰ  
建武2年12月11日 足利尊氏寄進状(縦紙)寸:30.9×50.1cm  
正平6年11月9日 足利尊氏御判御教書(小切紙)寸:15.5×15.2cm



写真Ⅱ  
「足水家蔵文書」建武3年3月15日  
足利尊氏御判御教書(縦紙)



写真Ⅲ 筆跡比較  
A:「足水家蔵文書」建武3年3月15日 足利尊氏御判御教書(縦紙)  
B:「三嶋大社文書」正平6年11月9日 足利尊氏御判御教書(小切紙)

※全体に揃った右上がりの文字、各文字のくずし方、バランス、筆運びに特徴。ただし、似かよった一部の文字だけで全く同一かの判断は難しい。また同じ文字でも細部に異なる筆運びも見える。ここでは一つの可能性として提示しておく。

尊氏小切紙文書を発給当初の文書そのもの(正文)、とする評価も充分考えられるのです。

なお、三嶋大社には他に3通の小切紙文書が残ります。上記史料集では全て「写」とされていますが、同様に検討が必要なことは言うまでもありません。

(三島市郷土資料館運営協議会委員・三嶋大社宝物館 学芸員 奥村徹也)

※紹介文書を公開中:三嶋大社宝物館、小特集展示「その名は 足利尊氏! ~大社に遺る11通の尊氏文書~」、平成31年3月24日(日)まで

## 三島の歴史とジオポイント 14

### —うない 右内神社—

三嶋大社の御門の右側を守る「櫛石窓命（クシイワマドノミコト）」を祭神とする右内神社（梅名1番地）は、下田街道の西沿いに鎮座しています。創建時期は不明ですが、文禄・慶長など江戸幕府成立前後の棟札が残されており、明治初年までは三嶋大社とともに賀茂郡地籍であった由緒ある神社です。近年隆盛の三嶋囃子は当地周辺などでも受け継がれてきました。

近世まで、神社の周辺には、三嶋大明神の使者とされる鰻がたくさん生息する「うなぎの池」と呼ばれる池があり、当社は「うなぎの宮」とも呼ばれ、氏子は明治の初めごろまで鰻を食べなかったそうです。

神社入り口の花崗岩製の新しい鳥居の両側には、安山岩製の立派な石燈籠があります。左の燈籠には天保10年（1839年）、右には天保8年（1837年）の彫り込みがあります。火袋は共に長岡凝灰岩上部層（産地は伊豆の国市・北江間）で作直してあります。関東地震（1923年）や北伊豆地震（1930年）で破損したようです。右側の燈籠の基礎には「石工木町平右衛門」と彫り込まれています。この石工は、信州・高遠藩・荊口北原村出身の旅石工で、三島宿・木町に定住した北原平右衛門（1775年～1833年）の子孫と思われます。

境内を進むと左手には大きさの違う安山岩質の転石が3個置かれています。「乞食石」「女石」「立石一表」と名付けられた「力石」です。昔は村内の若者たちがこの石を持ち上げて、力比べをしたのでしょう。昔ほどの村にもありません。

社殿の前には鳥居の柱石が二対、立っています。共に長岡凝灰岩上部層で作られているようです。手前の一對は大正13年3月と彫り込まれています。奥の一對には設置時期を示す彫り込みは確認できません。当地域の地震の記録からすると、大正12年の関東地震で石鳥居（奥側の一對）が壊れたので、翌年大正13年に作り直したのですが（手前の一對）、6年後の北伊豆地震でまた壊れてしまったようです。これに懲りたのか、石の鳥居はしばらく作られず、71年後の平成13年に現在の石鳥居を建てたようです。三島市内の神社の多くに、石鳥居の柱石が残っています。関東地震や北伊豆地震の災害を今に伝える大切な記念碑となっています。

境内右手の説明版には、三嶋明神参詣の途中、当社に立ち寄った源頼朝が、手洗い水がないことを不自由に思い、薙刀で参道地面を二三度突いたところ、そこから水が湧き出したとあります。北伊豆地域に多い「頼朝伝説」のひとつです。神社周辺には「うなぎの池」があったように、湧水があちこちで湧き出していたのでしょう。現在はその一つが社殿右側に一か所だけ残っています。

当社は『延喜式神名帳』の「伊豆國賀茂郡伊波氏別命（イハテワケノミコト）神社」に比定される式内社とも考えられています。伊豆の穀倉地帯の中心地のひとつである梅名に祀られた由緒ある神社です。梅名のみならず三島市の発展をいつまでも見守っていただきたいものです。



右内神社正面の鳥居と石燈籠



社殿と鳥居の石柱二組

## ふるさと講座「明治の石碑めぐり」報告

- 開催日時 平成30年11月1日(木) 8:30～15:30
- 参加者 24人
- 講師 郷土資料館学芸員
- 見学場所 市内にある明治の偉人や記念碑などの石碑9か所をバスと徒歩でまわりました。矢田部盛治・福井雪水・吉原守拙・吉原呼我・大村和吉郎などの明治に活躍した人々、日清戦争の記念碑、戸長役場の門柱などを知ること、三島の明治時代について学びました。身近にありながら知らなかった碑や人を知ることが出来てよかった、などのコメントが多く寄せられました。



吉原守拙・呼我の墓(林光寺)

## 郷土教室・体験イベントの報告と予定

郷土資料館では、楽しみながら学べる体験イベントをボランティアさんと一緒に開催しています。平成30年7月から10月までに行った事業をご紹介します。

日程	郷土教室	内容	参加者
7月14日(土)	古代の暮らし	勾玉づくり、火おこし、土器あてクイズ、スタンプラリー	51人
7月29日(日)	昔の暮らし(回想法)	昭和のなつかしい道具を見て、触って、思い出を話し合う	43人
	機織り体験	展示室の機織りを使って裂き織りを行う	2人
8月4日(土)	クラフトづくり	木やどんぐりなどを使った工作	55人
8月23日(木)	紙漉き体験	紙漉き体験で和紙葉書作り、くずし字ハンコのスタンプ押し(協力:三島ゆうすい会)	62人
8月25日(土)	楽寿園の自然	火山の噴火実験。溶岩流の様子を再現	60人
9月1日(土)	楽寿園の自然	どんぐりゴマ・ネックレスづくり、葉の拓本カード	83人
9月15日(土)	紙で幻灯機をつくらう	紙で昔の幻灯機(スライド映写機)を作る	4人
10月14日(日)	昔のあそび	ブンブンゴマ作り、こま・けん玉遊び	62人
10月20日(土)	昔のどうぐ	石臼・和菓子の木型・鯉節けずりの体験	47人



昔の暮らし(回想法)



紙漉き体験



昔のあそび

## これからの郷土教室の予定

日程	郷土教室	内容
12月8日(土)	わら細工	わらで正月かざりをつくる ※雨天中止
1月19日(土)	リリアン編み	毛糸で干支のイノシシをつくる ※10:00～12:00、要申込み(～12/16まで)
2月9日(土)	昔のどうぐ	石臼・鯉節削りの体験、製麺機でミニチュアうどんを作る
2月23日(土)	遊んで学ぼう富士山デー	富士山の溶岩観察、富士山にちなんだカルタで遊ぶ
3月9日(土)	江戸時代の三島宿	立版古づくり、三島宿の展示ガイド

## 寄贈・購入資料の紹介

平成30年7月から10月までに、次の方々から寄贈のご協力をいただきました。ありがとうございました。また、平成29年9月から平成30年10月までに新たに11点の資料を購入しました。

### ●寄贈資料

寄贈者	資料名	点数
秋津 貞一氏（三島市）	ハエ取り器（ガラス製、天井用）	1点
白井 幸太郎氏（三島市）	昭和20年人口調査資料（中郷村）、三郡各ヶ村里程表	33点
津田 和雄氏（三島市）	江戸時代古文書、食器、自動車関連資料、錦田村資料	1式
三島市立図書館	北上村研究会調査資料、石油化学コンビナート対策三島市民協議会印ほか	1式

### ●購入資料

観光の三島 昭和十五年版	冊子、1冊、昭和15年発行。口絵、伊豆国概説、町内各所の解説。
沼津を中心とする東海道名勝と伊豆の温泉	鳥瞰図、1点、昭和3年発行。沼津を中心に大磯から丸子までを描き、東海道沿いの名勝と伊豆半島の温泉地を紹介。
三島市街の内市ヶ原	絵葉書、1点、明治末～大正前期。
官幣大社三島神社前	絵葉書、1点、明治末～大正前期。
三島市勢の概要	状、1点、昭和16年発行。沿革、市勢一覧、名所・旧跡。
三島町勢一斑 昭和十一年度	冊子、1点、昭和11年発行。町市街全図、口絵、地勢・沿革・三島町歌ほか。
三島中郷村野良の昼餉	写真（台帳付）、1点。野良仕事に従事する男女の昼餉の光景を撮影したもの。
三島町勢一斑 昭和十年	冊子、1点、昭和10年発行。町市街全図、口絵、地勢・沿革・三島町歌ほか。
金鷄印ミルク煉乳 片面看板	ホーロー看板、1点。（下記参照）
豆州君沢郡御園村御仕置五人組帳	古文書、1点。延享4年（1747）作成の御園村の五人組帳。以降、寛延3年（1750）までの請書と署判あり。三島代官所宛。
東海道名勝遊覧案内図	鳥瞰図、1点、大正15年発行。表紙あり。千葉から用宗（静岡市）までを描き、官営・民営の鉄道路線と温泉地・特産物等を紹介。

### 購入資料の紹介「金鷄煉乳」ホーロー看板

花島兵右衛門が明治29年に設立した花島煉乳場の主力商品「金鷄煉乳」のホーロー看板です（花島兵右衛門及び金鷄ミルクについては本紙1～2頁参照）。三島生まれの全国的な人気商品で、明治時代に国産随一と評されたこの金鷄ミルクに関する資料は、花島家文書中にほとんど含まれておらず、これまで商品ラベルなどを展示することが困難でした。今回購入したホーロー看板には商品のロゴやパッケージが描かれており、三島生まれの煉乳が販売されていた当時の様子を伝えています。近代以降の三島の歴史を語るには欠かせない貴重な資料です。



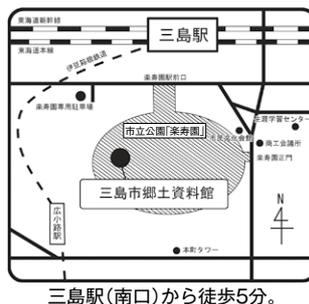
### 郷土資料館のご案内

〒411-0036 静岡県三島市一番町19-3 楽寿園内  
TEL 055-971-8228 FAX 055-971-6045

開館時間 午前9時～午後5時（4月～10月）  
午前9時～午後4時30分（11月～3月）

休館日 毎週月曜日（祝日の場合は翌平日）、  
年末年始

入館料 無料（ただし楽寿園入園料として別途  
300円。15歳未満は無料、学生は学生証  
提示にて無料。）



三島駅(南口)から徒歩5分。

### 郷土資料館だより

Vol.41 No.2(第122号)

発行日 平成30年12月1日(年3回発行)

編集 三島市郷土資料館

発行 三島市教育委員会

E-mail : kyoudo@city.mishima.shizuoka.jp

URL : <http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/>

(HPをリニューアルしました。ご覧ください)